

# 向学館通信

2008・9・25

「考える力」をつけるには、国語力の強化を  
国語力はすべての理解の元です。言葉が貧  
困では英数理社の理解が困難です。国語力  
は、単に学校の教科書だけで育つのではあ  
りません。新聞、本などを読んでください。

## 理科・社会は、単純な「暗記モノ」ではありません

理科・社会の勉強は、とても大切です。高校入試では数学や英語と並んで同じ配点だから、入試勉強として重要であることは間違いありません。しかし、それ以上に、ものを考える道筋というか、考え方の基礎のようなものが身についていくことが、とても大事なことだと思います。ところが、こうした大事さに気付かず「理科や社会は暗記モノだから、覚えたらいいだけだ」と考えている人が結構いるようです。

実際には、「暗記モノ」と考えている人たちの多くは、その暗記さえできていないのです。暗記しようとする人たちは、たとえば教科書の太字の部分だけを覚えればいいのだと考えることが多いようですが、なかなか覚えられないのです。

太字の部分だけを覚えるとは、具体的にどういうことなのか。例を挙げて説明します。たとえば、歴史で「1192年、鎌倉幕府」と覚えたとします。しかし、これで、何がわかったのでしょうか。何か理解できたのでしょうか。

少なくとも、源頼朝がなぜ京都でなく鎌倉に政府を置いたのか、なぜ平氏に勝てたのか、それまでの貴族の政治と違う武家の政治とはどんな内容だったのか、なぜ武士が大きな力をつけていったのか、といった疑問を解いていくことで、歴史的な事柄の意味やその時代の様子が「理解できる」わけです。したがって、理解するには、まず「疑問」が要るわけです。「なぜ、なぜ」という問いを自分で立てることで、理解できるのです。

ところが、「なぜ」という問いを一切発することなく、書いてあることを覚えるというのは、与えられたものをそのまま鵜のみにすることで、自分の頭脳を一切使わないことです。この違いが非常に大きいのです。一方は、自分の頭を使って「なぜ」「どうして」を繰り返すことで物事の関連やより本質的なレベルでの理解が得られます。他方、覚えればよいと思っている方は、意味不明のことを頭に詰めこもうとしているのですから、定着はしません。この両者の頭の使い方の差は、何年にもわたって続くのですから、結果は極めて大きな差異になります。

理科についても、論理的に納得するまで考える人は、さまざまな領域での頭の活動に役立つことを体得していきます。

## 理科・社会は、教科書をしっかり読むことが一番

国語の学習をしていて、文章全体の意味を理解しようとしないう人が、かなりの割合でいることがわかっています。国語の教材に出てくる文章を読んで、その意味を考えて答えを出すのではなく、問題の部分に当たる語句が本文のどこにあるかを「探すだけ」というやり方です。だから、要約したり、趣旨を書いたり、といった記述式の問題は、ほとんど白紙にしています。文章全体の意味が分からないのだから、要約などしようがないのです。(ついでにいいますと、こういう人には、市販の国語の問題集などをやらせても全く力がつきません。)

こういうタイプの人には、当然のことですが、理科や社会の教科書がほとんど読めません。文の一字一字、一行一行をしっかりとどっていきることができません。そういう読書習慣がないからです。しかし、教科書を読むという一番基本のことができないようでは、意味のまとまりや、ある事と別の事との関係など、理解につながる大事な要素をつかまえられません。

中三になると、いやでも理科・社会の勉強が強いられます。高校受験には大事な科目ですから、「やらなければ」と誰でも考えます。しかし、勉強の仕方がわかりません。こういう人たちの多くが、問題集をやりたがりです。問題集をやって、わからない問題にあたると、答えを写して暗記しようとし、それで勉強した気分になっています。だが、これは本当の勉強ではないし、頭に残ることもたいしてありません。

勉強の仕方は、基本に立ちかえって教科書をしっかり読み、意味を考えるしかないのです。